



なが〜いお付き合い

岩澤うつぎ

東京都立広尾病院皮膚科部長

平成元年に日本大学を卒業し、そのまま皮膚科の医局に入局しました。初めは疾患を覚える、病棟処置をする、などに無我夢中で、あっという間に1年が過ぎました。医局長も経験し、医局をまとめることのむずかしさを実感しました。気がつけば医者になってから7年になろうとしていました。ふと、自分には専門がないと思い、手術とレーザー治療を勉強するため、当時大原國章先生が部長でいらした虎の門病院で研修をさせていただきました。手術やレーザーの件数も多く非常に忙しかったのですが、その忙しさが辛さではなく楽しく感じられました。

私の手術の師匠である大原先生は当時、虎の門病院で初診を2日、再診を2日診察し、手術日は木曜でしたが、水曜や金曜にも手術に入るという過密スケジュールをこなされていました。その中で、再診の患者さんは10年、20年と通ってきている方が珍しくありませんでした。しかも、待ち時間が2時間以上になることもしばしばで、それなのに診察時間は5分で終了ということも……(もちろん全員ではありませんが)。大原先生が、「次は半年後ね」とか「また来年」というと患者さんは「はい、よろしくお願いします」といって帰られます。最長で診察されている患者さんは25年とか27年とか……大原先生は半ば本気で「ギネス記録に申請しようか」とおっしゃっていました。私は、先生の外来についていてたいへん驚きました。それまで、同じ患者さんをずっと診察するということが少なかったからです。しかも半年

後や1年後の約束をして帰るなんて……。

大原先生も同じ患者さんを継続してみることの大切さをいつも語っておられました。いわゆるクロノロジーです。勤務先など診察する側の条件も合わないと、なかなか1人の患者さんをずっと診察し続けることは困難です。

私は虎の門病院に10年間お世話になり(結局、大学に戻らず、当時の日大の鈴木啓之教授にはたいへんご迷惑をおかけしました)、その後、都立広尾病院に勤務しています。広尾病院も今年で15年目になりました。

虎の門病院から広尾病院に異動する際に、何人かの患者さんは広尾病院についてきてくれました。手術の術後の方や、レーザー治療を行った「あざ」のお子さんたちです。悪性腫瘍の術後の患者さんが10年、15年と再発なく通っていただけるのは医者冥利につきます。「あざ」のお子さんたちは治療開始が生後半年や1歳でしたので、治療が落ち着いて途中は学校が忙しく中断しましたが、成人してまた通ってくれています。「えー！ もう成人式？ 小さかったのにね。お母さん、お互い歳をとるはずですね」とお母さまと顔を見合わせます。その時のお母さまの顔はとても嬉しそうなので、私も嬉しくなります。

これからも患者さんと「なが〜いお付き合い」をしていけるように、自分も健康に気をつけ、日々努力していきたいと思います。